

國立高雄餐旅大學の視察報告

塩 月 亮 子

はじめに

2012年8月19日～23日の5日間、筆者は台湾の國立高雄餐旅大學を視察した(写真1⁽¹⁾)。大学名にある「餐旅」とは「ホスピタリティ」の意味で、当大学は台湾の高雄市小港区松和路1号に本部を置く、ホテルや旅行会社、航空会社、レストランなど観光・ホスピタリティ業界で活躍する人材育成を目指す国立大学である(写真2)。本稿では、主に当大学でヒアリング、および見学したことをもとに報告を行う。

1. 沿革および学部・学科構成

國立高雄餐旅大學は、もともとは観光客増加による国家予算の措置で、1995年に國立高雄餐旅管理專科學校として設立された、ホテルを中心とするサービス産業に従事する人材育成のための2年制の技能養成学校であった。それが2000年には修学期間を4年間に延長して國立高雄餐旅学院と改称し、2010年には4年制大学として昇格し、現在の名称となった。

國立高雄餐旅大學の学部・学科構成は次の通りである⁽²⁾。まず、学部にあたる學院には(1)餐旅學院(2)觀光學院(3)廚藝學院の3つがあり、それぞれ(1)ホスピタリティ学部(2)観光学部(3)クリナリーアート学部と翻訳できる。また、系と呼ばれる学科は(1)の学部には旅館管理系(ホテルマネジメント学科)、餐飲管理系(レストランマネジメント学科)、餐旅暨會展行銷管理系(ホスピタリティ及びコンベンションマネジメント学科)、應用日語系(應用日本語学科)、應用英語系(應用英語学科)の5学科が、(2)には旅運管理系(旅行マネジメント学科)、航空暨運輸服務管理系(航空及び運輸マネジメント学科)、休閒暨遊憩管理系(レジャー及びレクリエーションマネジメント学科)の3学科が、(3)には西餐廚藝系(西洋料理学科)、中餐廚藝系(中華料理学科)、烘焙管理系(ベーキング管理学科)の3学科がある。また、昼間部のほかに社会人のための夜間部もあり、学生数は全部で約5,000人である⁽³⁾。

大学院も(A)餐旅管理(ホスピタリティマネジメント)研究所(B)餐旅(ホスピタリティ)教育研究所(C)旅遊管理(旅行マネジメント)研究所(D)台灣飲食文化産業研究所の修士4課程が用意されている。



写真1 ゼミ3年生(前澤美咲さん)と筆者(左)



写真2 キャンパスの様子

2. 特徴—全寮制とインターンシップ—

実践や技能を重んじる当大学の特徴の一つに、全寮制がある。これは現在、1年生のみを対象に実施しており、遅刻、髭、茶髪は厳禁とし、早起きして学内の掃除をし、制服をきちんと身につける訓練をしている。近いうち、2年生も寮生活になる予定という。

制服はネクタイやTシャツの色などが学科により異なっている。見分けやすいのと同時に、それぞれの学科に誇りをもつようにとの意図もある。

掃除に関しては、寮で暮らす1年生は毎朝6時半～7時半にかけて行うが、自宅や下宿通学となった2年生も午後から学内清掃を行い、4年生は花や木に水をやるのが義務付けられている。寝坊して行わなかった場合には、翌年またやらなければならない。ちなみに3年生は、インターンシップに出ているので、清掃等は免除される。

実践力の養成を教育目標に掲げている国立高雄餐旅大学では、3年次に必ず全員が1年間の学外インターンシップ(20単位)を行うことが義務付けられている。応用日語科の学生などは、沖縄をはじめ、日本各地のホテルに研修に行くことも多い。

インターンシップに関して、国立高雄餐旅大学の学生たちは企業から引く手あまたという⁽⁴⁾。2～3月に企業は大学に来て学生と面接をする。もし旅館管理系の学生であれば、大学に来た数多くのホテルのなかからインターンシップ先を選ぶ。この学科は台湾中のホテルとつながりがあり、また先輩・後輩の関係も築いてきた。学生は1人につき3カ所しか面接を受けてはいけないという規則がある。学生は事前に行きたい企業に申し込むが、面接で落ちることもある。

また、台湾では給料をもらえないインターンシップはありえないので、沖縄などに学生がインターンシップに行く場合、教員は受入先に「正社員として教育してほしいし、給料も最低賃金でもよいのでもらいたい」と交渉する。企業は学生がインターンシップを行えば、その1年分をキャリアとして数えるという。

大学にはインターンシップに関する統一の窓口があり、職員がいる。台湾国内に関しては、研究発展処の実習輔導組、卒業生に関しては就業輔導組が指導するが、日本など海外の実習先は教員が面倒をみている。

学生のインターンシップ先は学科→学部→全学の順に、実習輔導委員会議を通して決める。業者からの成績が悪ければ退学させることもあるといい、国立高雄餐旅大学ではこの1年間のインターンシップを大変重視していることがよくわかる。

3. 実習のための様々な施設

次に、キャンパス内の様子、特に実習のための施設を紹介する。キャンパスには行政ビルや人文ビル、教学ビル、第三教学ビル、図書資訊館、第一実習ビル、第二実習ビル、学生寮や食堂などがある。そのなかでも、筆者が宿泊し、また見学させていただいた第一実習ビル(正式には第一專業實習大樓)に関する説明を行う。

まず、8階建ての第一実習ビルの最上階には迎賓用ホテルとして群賢會館があり、旅館管理系の研習(学内インターンシップ)に使用されている(写真3・4)。大学内のホテルは1フロアのみで、部屋は全部で16室ある。なかにはVIPルームもあり、そこには外風呂(ジャグジー)も付いていた。また、1室はバスルームの清掃の様子が見えるように、ガラスの囲いになっていた(写真5)。さらに、研修の一環として、毎日西洋式の朝食が学生の手により運ばれてきた(写真6)。

続いて第一実習ビルの7階にはヨーロッパ式バーがあり、6階には調理実習室(九州国際大学の語学研修団のための饅頭作り実習が行われた場所)がある(写真7)。その下の5階には、火の神である火土神を祀った中華料理室があった。4階には旅行会社のカウンターや機内を模した教室(模擬客艙暨運務實習教室)があり(写真8・9)、3階にはパンやケーキ、クッキー、チョコレートなどを作る教室や学生が作ったパンやケーキを売るカフェなどがあった(写真10)。2階は西洋料理室でアメリカスタイルのレストランも用意されており、1階のワイン室では香りの実習を受け、ソムリエの資格取得を目指す(ちなみに台湾では18歳からお酒は飲んでよいという)。続いて地下1階にはワインや食材の貯蔵庫があった。



写真3 大学内のホテル研修①



写真4 大学内のホテル研修②



写真5 研修用のバスルーム



写真6 朝食



写真7 語学研修の一環としての料理教室（九州国際大学）



写真8 航空会社のカウンターがある実習教室



写真9 機内実習教室



写真10 学内のカフェルーム

技能や実践を重んじる様子は、このような実習ビルがあることからもうかがえる。

4. 語学研修と交換留学生制度

語学研修団をはじめ、海外からの学生を受け入れる部署としては進修推廣學院推廣教育中心（生涯学習教育センター）があり、台湾に入学してから出国するまでのスケジュールをアレンジしている。これまで中国やドイツ、カナダ、中南米などからの訪問団が来た。学生がこの語学研修に来るには、引率者の教員が最低1名必要となる。当センターでは貸切バス（大学も数台所有している）やホテルのアレンジも行っている。

今回見学させていただいた九州国際大学のような語学研修団に対しては、このセクションと応用日語系が力を合わせて研修を実施する（写真11）。まず、参加人数と実施日、何日間のコースが希望かを伝える。今回、九州国際大学は計14日間の語学研修のうち、2～3日間の台北観光を希望したが、それも当大学ですべて手配した。実習ホテルでの宿泊代は1人につき9日間で8,000台湾ドル＝24,000円ほどかかった。実習ホテルは2人部屋だが、3人1部屋も可能とのことである。

次に、半年から1年間滞在する日本からの交換留学生に関しては、国際事務処が窓口となるが、実際は日本語がわかる応用日語系の教員との交渉で決定する。九州国際大学は、毎年2名ほど送ってくる。また、阪南大や山口大学、



写真11 語学研修の様子（九州国際大学）

徳山大学などからも1、2名来るとのことだった。

現在、阪南大学や九州国際大学、京都学園大学、徳山大学、山口大学、城西国際大学との間で交換留学生制度の協定を結んでおり、協定書は日本語版と中国語版両方で作成している。そのうえで、「共同教育プログラム」＝「2プラス2プログラム」⁵⁾(両方の大学の学位が取れる共同教育プログラム)が締結されている。

万一留学生がインターンシップ先を探したいと言え、統一窓口があるのでそこで紹介できる。その場合、学内の企業による面接・説明会に合わせて春に来たほうがよいとのことだった。これまでカナダ人の留学生が、2月に来て6月まで学び、7～8月の2カ月間、インターンシップを体験して帰国した例があるという。

5. 国際事務処（国際部）の役割

国際事務処（国際部）は交換留学生の面倒を見る部署である（写真12）。中国やカナダからは半年間留学に来る。期間は半年でも1年でも可で、時期は9月～翌年1月までがベストという。台湾での前期は9月10日（中旬）頃～翌年1月までの4ヶ月半なので、8月中旬～下旬に来て手続きすれば十分という。應用日語系の2年次か4年次に編入し、旅館学科や航空学科の授業を少しとることもできる。CAの模擬用キャビンでの授業を受けることも可能である。もし後期なら2月中旬から6月末までの4ヶ月半、計18週となる。従って、留学は9月からでも2月からでもどちらでもよい。寮はあるが、生活費は自分持ちとなる。姉妹校（協定校）なら学費は免除だが、他に自費留学もある。その場合、授業料は半年分2,000米ドルかかる。インターンが終われば「インターン終了証明書」を発行している。

寮は女子寮と男子寮に分かれている。4人一部屋で、4ヶ月半11,500台湾ドル＝383米ドルかかる。2人部屋はもう少し高くなる。なお、この値段は学期中の寮費とのことであった。



写真12 應用日語系の主任（左）と国際事務処の先生方（中央）

おわりに

このたびの訪問では、お互いの大学について紹介した後、インターンシップの実施方法や語学研修団、及び交換留学生の話し合いがなされた（写真13）。そのとき、跡見学園女子大学がインターンシップ先の確保で苦勞するのは実習期間が2週間と短いからではないか、跡見も学外にカフェテラスを一つ出し、そこをインターンシップ先にしてはどうか、あるいは、まずは国立高雄餐旅大学に跡見学園女子大学から語学研修団を送り、2～3年後に交換留学生（これには協定が必要）を送る仕組みを作ることができればよい、その場合、台湾から日本に行く学生のためには宿を考慮してほしいなど、大変具体的なアドバイスや提案をいただいた。



写真13 日本情境教室内での会合

今回は、より実践的なホスピタリティ教育を施している国立高雄餐旅大学から、実習教室やインターンシップの仕組み、語学研修団のことなど、多くのことを学ばせていただいた。今後は、学生に語学力や国際的視野を獲得させるためにも、観光やホスピタリティ分野を共にもつ両校の交流を促進し、よりよい刺激を与え合う互惠関係を構築していきたい。

謝辞

このたびの訪問では、国立高雄餐旅大学應用日語系主任の施文華先生に大変お世話になった。また、同学科の前川正名先生、菊川秀夫先生にも、会合時に様々なご意見いただいた。さらに、同大学国際長の陳淑娟先生、及び旅遊管理研究所の何景華先生にも、両校の交流に関する大変前向きなお話をいただいた。その他、中華料理の実習の見学許可をくださった中餐厨藝系の何建彬先生、語学研修団の様子を快く見学させてくださった九州国際大学の井上貴仁先生、ならびに進修推廣學院推廣教育中心（生涯教育センター）職員の蔡欣穎さんや呉香臻さん、我々に朝から晩までずっと付き添い案内してくれた應用日語系4年生の孫顧云さんと張珮華さん、その他お世話になった大勢の方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

なお、今回の訪問は跡見学園後援会外国出張補助による助成を受けた。あわせて感謝を表したい。

註

- (1) 本稿に掲載した写真1～13はすべて筆者が国立高雄餐旅大学滞在期間中に撮影したものである。
- (2) 国立高雄餐旅大学大学パンフレット、および伊藤恵美子 2012年「日本語習得における中等教育と高等教育の連携効果—ユウキ・ナツミとサキ・イケの表現力から—」『東邦学誌』第41巻2号、pp.101-114 参照。
- (3) 3年生約1,000人は1年間のインターンシップに出ているため、キャンパスに常時いる人数は約4,000人となる。
- (4) 同じく高雄市にある私立の義守大学は、大学の敷地の隣に「義大世界（義大ワールド）」というテーマパークをつくり、何百人もの学生をインターンシップ先として送り出しているという。また、ホテルも持っており、そこでのインターンシップも可能という。
- (5) 1、2年次は入学した大学で、3、4年次は他大学に留学して4年間学ぶと、両大学の卒業証書が受理できる仕組みのこと。